遊学舎武雄こども園　園だより
2023 年（令和５年）度　６月号

「１７２のこころ」

　ふたばぐみさんは親子でえらんだかぼちゃの苗とスイカの苗を植えました。

　お迎えの時間にスイカの苗を植えていたＪさん親子。　スイカの苗を見つけたＪさんは、「なんだろう」と葉っぱをさわったり、苗のカバーを上下にゆさぶったりして確かめていました。

　その様子を優しいまなざしで見つめるＪさんのお母さんの姿。
「ねぇ！みて」と言いたそうな誇らしそうな表情で、指先に小さな土を握りお母さんに見せていたＪさん。
　２人は優しく見つめあっていました。

　この穏やかな時間が、Ｊさんにとってスイカとの出会いを、豊かな経験としてくれたようでした。

武雄こども園にがまくんがやってきて約3年。みんなの人気者で、園庭をお散歩させてあげたり、みんなでエサを必死に探したり、お風呂の水をかえてあげたり…子どもたちのたくさんの優しさに包まれていたがまくんでした。
命あるものとの接し方を考え、いたわり、大切にしようとする気持ち、がまくんとの触れ合いはまさに命の学びでした。
がまくんが教えてくれた命の尊さや悲しみは、子どもたちの心の中に静かに根付いていってくれることでしょう。

昨年から始まった１７２colors。色とりどりのカードに載せられたお子様へのメッセージには、廊下を通るたび心を奪われます。
それぞれの色、それぞれの言葉。しかし全てに共通している想いは、「生まれてきてくれて、ありがとう」という不変の愛。

この春、高校生になった子どもを持つ職員から「１日でいいから小さかった我が子をもう１度抱きしめたい。」という言葉が聞かれました。それを聞いていた同世代の子どもを持つ別の職員が「ううん、１分でもいいから抱きしめたい。」と呟いたのです。

我が子が生まれたその瞬間から、時間の軸は完全に子どものもので、子どもが生まれる前と同じ生活は難しいものです。そしてその日々は出口がないトンネルのように見えるときも。
でも、喧噪が収まり、夜、寝静まった姿をふと見ると、その足、手、髪、表情が、確実に昨年の今頃よりも大人に近づいているかのように見えることがあって、嬉しいのと寂しいのとが入り混じった、何とも言えない複雑な気持ちになるのです。多分、こんな日々が重ねられて、気がついたら「１分でいいから抱きしめたい」という日を迎えるのでしょう。ほっぺの温もり、首にしがみつく腕、膝に乗せる足、耳元で甘える声、涙で濡れた顔、とびきりの笑顔。この全てが、「１日でいいから、１分でいいから」を生み出す要素。

もしかしたら、私たちが今通っているトンネルは、真っ暗だからではなく、明るすぎて出口が見えないのかもしれません。通った後に出口の外から見るトンネル。それは保護者様とお子様がそれぞれ違った場所から眺める日が来ても、いつまで経っても、きっと今と同じ、眩い光を帯びたままなのでしょう。そう考えると、出てしまうのが勿体なくて、時々休みながら、時々少し戻りながら、できるだけゆっくり歩んでいきたいと思うのです。